

令和5年度

広島平和記念式典中学生派遣事業

報 告 書



川 越 市

事業の概要

- 1 目的 未来を担う若者を被爆地広島へ派遣し、平和記念式典への参列、平和記念資料館や原爆ドームの見学を通して、平和の尊さ大切さを学ぶことを目的とする。
- 2 期 日 令和5年8月5日（土）～6日（日） 1泊2日
- 3 派遣人数 22名
- 4 選出方法 各市立中学校から校長推薦により生徒1名を選出
- 5 対象学年 第2学年
- 6 説明会 令和5年7月25日（火）午後1時30分から
- 7 感想文 報告書として編冊し、派遣生徒及び学校へ配布。
令和6年度の原爆写真展の際に展示。
- 8 意見交換会
及び体験発表 令和5年8月19日（土） 午後1時～午後4時
市立博物館 視聴覚ホール
「平和を考える集い」の際に、派遣生徒22名の中から6名
による体験発表（感想文の朗読）を実施。

日 程

【説明会】 令和5年7月25日（火）

時 間 午後1時30分～午後3時30分
場 所 市役所7階第5委員会室
内 容 市長あいさつ、自己紹介、事業説明、班別交流

【派遣1日目】 令和5年8月5日（土）

6：30 東武東上線川越駅改札口集合
6：52 川越駅出発
8：48 東京駅出発 [のぞみ63号]
12：42 広島駅到着
14：00 平和記念公園見学（平和記念公園及び平和記念資料館等）
17：15 平和記念公園出発
17：30 ホテル着

【派遣2日目】 令和5年8月6日（日）

6：45 ホテル出発
7：00 平和記念公園到着 式典受付
8：00 平和記念式典 開会
9：30 ホテル到着
10：00 ホテル出発 市電にて広島駅へ
10：30 広島駅到着 自由行動
13：03 広島駅出発 [のぞみ96号]
16：57 東京駅到着
18：30 川越駅到着 解散

【平和を考える集い】 令和5年8月19日（土）

時 間 午後1時00分～午後4時00分
場 所 市立博物館視聴覚ホール
内 容 意見交換会、体験発表、講演会

参加者感想文



戦争を知らない私たち

「あなたにとって、平和とは何ですか？」

そう誰かがあなたに聞いたら、あなたは何と答えますか。不自由なく生きること、楽しい生活を送ること。これらは身近な平和で、他にもたくさん考えられます。

今から78年前、1945年8月6日午前8時15分。広島に原子爆弾が落とされました。今の広島からは想像がつかないほど焼け野原が広がることになったそうです。私は、平和記念資料館で再現のジオラマを見ましたが、それでさえ怖いと思ってしまったのに、何百倍もの威力があったと思うと言葉では言い表せられない恐怖を感じました。これは、戦時中の人達の衣服を見ていたら更に伝わってくるものでした。ポロポロになり、それがズボンなのかシャツなのか分からないほどのものや、つぎはぎされてあるもの、血のようなものがついたものまでありました。それだけではありません。爆撃で人の影ができていた壁、ぐにゃりと曲がった水筒や弁当箱、遺書までありました。

広島に原爆を投下した第二次世界大戦では、平和意識の向上や原爆から助かった人が全員地下にいたことから核シェルターが作られた、というような話もありました。もちろん、戦争が起きないことがいちばんですが、戦争という悲惨な出来事がなければ今もたくさん起きてしまったのか。そう思うと自分がどこかにいます。

多くの人が平和を求めているはずなのに、戦争は起こってしまったのです。私たちの平和を守っていくのに必要なものは何でしょう。私はたくさんあると思います。生きてくてもそれができなかった人の分まで生きること、一人ひとりが平和について考えること。それだけではなく、身近な平和でも考えていかなければ、いずれ大きな問題になってしまうのかもしれない。私は、「戦争」を知りません。だからといって、「自分に関係ない。」で済むものでもありません。私たちは、平和を守るために、楽しく生きるために、二度と過ちをおかさないために「平和」について考えていかなければならないのだと思います。

あたり前の平和へ

私は、今回の広島平和記念式典中学生派遣事業に参加して、「あたり前にある平和の大切さ」「原爆の悲惨さ」を自分の目で見て、聞いて、感じる事ができました。

平和記念資料館では、私が想像していた何倍も悲惨な、当時の惨状を示す数々のものが目に飛び込んできました。ぼろぼろになった三輪車、何もなくなった広島、地獄といわざるをえないような光景の数々。思わず写真を撮る手をとめて、立ちつくしてしまうほど、私は苦しさとしさを感じました。

中でも、特に心に残ったのは、真っ黒になったお弁当です。ガイドさんのお話では、お弁当の持ち主は、このお弁当を食べることをとても楽しみにしていたそうです。でも、食べることはできず、真っ黒になって展示されています。もしも広島に原爆が落とされていなかったら、「おいしい」と笑顔でお弁当を食べる姿があったのです。一瞬で家族も友達も笑顔も未来もすべてを壊してしまう原爆というものに、怒りを覚えました。

平和記念式典では、8時15分に黙祷がありました。その瞬間、それまでざわざわしていた空気がしんと静まり返り、平和の鐘が響き渡りました。私は、この2日間で見えてきたことを思い出し、あたり前にある平和がどれだけ素晴らしいことか、もう二度とこのような悲惨なことをおこしてはならないのだと強く心に刻みました。

世界には、今もなお戦争をしている国々があります。平和があたり前ではなく、笑顔や未来が壊されてしまった人々がいます。昨日までの生活が、次の日には一変するほど、あたり前の平和はとてももろいです。だからこそみんなであたり前の平和を支えなくてはならないのだと思います。「1人1人が平和を大切にする事」「広島で起きたことを忘れず、もう二度と繰り返さないと思うこと」が大切だと思います。平和と笑顔であふれた世界になることを強く願っています。

派遣事業に参加して

1945年8月6日8時15分、広島で人類史上初めて、都市に原子爆弾が投下され、14万人もの多くの人々の命が奪われました。

78年経った今でも、8月6日に広島の平和記念公園で行われている広島平和記念式典。私は今回、毎年テレビで見っていた式典に参列できると担任の先生から聞き、実際に自分の目で耳で心で感じ、もっと深く学びたいと思い参加させていただきました。

一日目、私たちは平和記念公園を周り、資料館に行きました。公園には、被爆者をモチーフにした像や慰霊碑、そして、原爆ドームがありました。亀裂のある壁、むき出しになっている鉄の骨組み、ガラスがすべてない窓の枠組み。ひとつひとつに戦争や当時の苦しみを感じました。資料館では、8時15分に止まっている時計やお弁当箱などから、当時の様子を被爆者が描いた絵や写真などが展示されていました。幼くして亡くなった子供たちの写真を見ると、心を締め付けるかのように、痛くなりました。写真や絵はどうしても直視できませんでした。衝撃が強く、本当にこんなことがあったのかと疑問に思うほどの、破壊力があったからです。当時の人たちが心から体までどれだけ強かったのかが分かった瞬間でした。

二日目、平和記念式典。テレビでは感じられない臨場感と緊張感を感じました。平和の灯も昨日と比べて強くなり、一日目とは全く違った顔を現しました。そして、式典が始まる頃には会場全体が世界平和で繋がっていました。式典の中で、私が一番印象に残っているのは、子供代表の言葉です。その中でも、私達にもできることとして、みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。という言葉には、気付かされたことがありました。それは、大きなことを無理して成し遂げることで成果を得るのではなく、小さなことからちょっとずつ積み上げていくことで、結果的に壮大なものを得ることが大事だということです。これは、世界平和や核兵器がない世界などを目指すのにもいえることなのではないでしょうか。

今回の派遣事業で、私は自分の目で見て、耳で聞いて、心の中で78年前の人々の気持ちを感じながら学ぶことができました。同じ過ちを繰り返さないために、年齢関係なく伝え続けたいといけないう使命を強く感じると共に、世界平和のために、日々精進していかなければならないと思いました。

身近な平和をつなぐために

私は、広島平和記念式典中学生派遣事業に参加して、平和の尊さ・大切さを学ぶことができました。

平和記念公園で、原子爆弾による被害について学びました。平和記念公園に着くと、まず目に入ってきたのは、原爆ドームでした。テレビなどで見たときには想像もできないような、原子爆弾の恐ろしさが伝わってきました。そして、平和記念資料館でさらに原子爆弾の恐ろしさを知ることになりました。資料館の中に入ると、周りの雰囲気が変わったのが分かりました。血まみれになった服、8時15分で止まった時計など、核兵器の凄まじさ、恐ろしさを象徴していました。壁に書いてあった、被爆者の声の文を読んでいくと、苦しさや悲しみが真近に感じられました。如何なる理由があっても、原子爆弾は決して使ってはならないものだ実感しました。

8月6日の平和記念式典で、多くの代表の方の挨拶がありました。どの方のお話にも、「核兵器の必要のない世界になってほしい」というものがあり、今でも心に残っています。しかし、その中でも一番私の中で印象に残っているのは、広島市の小学生による「平和への誓い」です。いくつかの問いかけから始まり、生き延びた人々の生きていくことへの苦しみなどが語られました。そして、最後には「私たちにもできることがあります。」「身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。」とありました。

私は、初日に平和記念資料館に行き、原子爆弾の恐さや簡単には言葉で言い表せないほどの被爆者の苦しみなどを感じることができました。この2日間を通して、このような惨劇を繰り返さないために、自分にできることを考え、自分から動く力をつけていきたいです。そして、身近にある平和を広げ、笑顔の輪を広げていきたいです。

1 分間に込める思い

昭和 20 年 8 月 6 日 8 時 15 分、広島に原子爆弾が投下されました。それから 78 年たった今でも、この日のこの時間に僕達は 1 分間の黙祷を捧げています。

今回、広島平和記念式典中学生派遣事業に参加させていただくまで、僕はこの黙祷を捧げる際、漠然と平和がずっと続きますように、戦争が起こりませんようにと思いながら目を閉じていました。しかし、今回、実際に平和記念公園や平和記念資料館を訪れ、広島で起きたことを目の当たりにしたことで、この 1 分間の黙祷に対する意識が変わりました。

平和記念公園は、原爆投下前はびっしり家が立ち並ぶ街だったそうです。そこでは、僕達と同じ中学生を始めとする子供達や、大勢の人達が普通の日々を過ごしていました。資料館に展示されていた日記や三輪車、お弁当箱等から、当時の子供達も今の僕達と変わらない生活をしていたことが、見て取れました。友達と遊び、時には悩み、お腹をすかせて、ご飯の時間を楽しみにする、未来ある子供達の姿がそこにはありました。

しかし、一発の原子爆弾が、その日々を一瞬にして奪っていきました。その数約 14 万人、川越市民の約 40%に当たる人数です。その数があまりにも多すぎるので、今までは、漠然と多くの人たちが亡くなった悲劇という認識でしたが、資料館に飾られた亡くなられた方の生前の写真や、平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑に奉納された一人ひとりの名前が記された死没者名簿、広島平和記念式典に参列していた被爆者や遺族の方の姿を見て、「多くの人達が原爆によって亡くなった」ではなく、「一人ひとりの大切な未来が原爆によって奪われた」という認識が変わりました。漠然とした平和への祈りだった黙祷が、名前を持ち顔を持った人達への黙祷へとくっきりと形を持つようになったのです。亡くなった方々一人ひとりに、平和の誓いを示す大切な 1 分間です。

今回の経験を、僕は多くの人に伝えていきたいです。そして、僕の話聞いた多くの方が更に多くの人へ伝えていくことが、原爆死没者慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」という平和への誓いを守ることに繋がると 생각합니다。

広島で感じたこと

私は、広島平和記念式典中学生派遣事業でたくさんのことを学びました。平和記念公園や平和記念資料館の見学、そして平和記念式典への参加で平和や命の大切さについてより深く考えることができたと思います。

この2日間で私が特に印象に残ったことは、2つあります。

1つ目は「なぜ自分は生き残ったのか。」という言葉です。これは平和記念式典での平和への誓いの一部です。一瞬にして多くの命が奪われ、今でも放射線によって苦しい思いをする人がたくさんいるということ、そして原子爆弾は生き延びて家族や仲間を失った人達にも心に深い傷を負わせたということを私は感じました。

2つ目は平和記念公園です。公園内にある広島平和記念資料館では、実際の写真や被爆した方の遺品を見ることが出来ました。写真を見ると、その時の悲惨な状況が伝わってきます。奥に進むと、溶けている三輪車が展示してありました。原子爆弾が投下された時の温度は約3000度から4000度で、鉄がとける温度が約1500度、太陽の表面温度が約6000度です。三輪車が溶けてしまうほど熱かったということが伝わってきました。また、原爆ドームでは、屋根がなくむき出しの鉄骨に言葉を失ってしまいました。「広島県産業奨励館」だった頃との大きさの違いや、原爆ドームにはいった大きなヒビが原子爆弾の恐ろしさを物語っていました。

平和記念公園にある平和の灯は、世界から核兵器が無くならないと消えません。世界から核兵器が一つも無くなり、平和の灯が消えるような世の中になってほしいと思います。また同じ過ちを二度と繰り返さない為に、私達の周りにある平和をこの世界で暮らす全員で守っていかないといけないと思います。

この2日間で学んだことを無駄にしないように、平和な未来を築いていきたいです。

私の「平和」

戦争。その言葉をもっと知りたいという思いで私は広島へ行きました。小、中学校の国語や道徳で何度か習ってきた題材でした。

ですが、私はそんなたくさんの物語を本当に身近に感じることは出来ませんでした。空から爆弾が降ってくるなんて、夢にも思えません。広島での平和記念式典に行けるという話を聞いて一番に思ったのは、戦争という夢だと思えるようなことを少しでも現実として感じたいということです。

一日目。戦争をこの目で実感しました。原爆ドームを見て一番最初に目が行ったのは、ゆがんで形を保っていない螺旋階段でした。ガイドさんによると、あれは鉄の階段で、鉄が溶ける温度は、千五百度だそうです。被爆時の熱がここまで伝わってくるようでした。

ほかに、原爆の子の像のまわりの千羽鶴が、一羽地面に落ちているのを見かけました。その時、一つ欠けるとこんなにも悲しいものなのかと私は思いました。

二日目。平和記念式典当日。セミがたくさん鳴いている暑い日でした。黙祷中もセミが鳴き止むことはありませんでした。七十八年前は、その瞬間にセミの声なんて少しも聞こえないくらいの爆音が響いたと思うと本当に恐ろしいです。

家に帰り、ネットにあがった式典の動画に「アメリカ人は来るな」というコメントが書きこまれているのを見ました。私は、現地で原爆を少しでも理解しようと思い来てくれた外国の方々にとっても感動しました。それだけに、このようなことを思う人がいることがとても悲しく感じました。

平和。それは、一人一人にあると考えます。成長にともない平和が何かも変わるかもしれません。私は今回広島へ行って、一つ平和を見つけました。

それは、私がこの事業を楽しんで受けられたことです。世界から核兵器が無くなりますように。

平和の大切さ

僕は川越市の代表の1人として、2日間広島で原爆のことや平和について深く学んできた。広島平和派遣を終えて、暗い話や経験、新しく知ること、辛い現実をたくさん知った。その中で特に印象に残ったことが3つある。

1つ目は、原爆ドームを見て、衝撃を受けたことだ。原爆ドームは写真でしか見たことがなかった。この2日間で見えてきたものは全てそうだったが、実際に行ってみると被害の大きさ、原爆の悲劇は、写真とは比べ物にならないほどの迫力があつた。たったの1発の原子爆弾で、何万人もの人が亡くなり、鉄骨以外の建物は全て粉々にしてしまう力に恐怖を感じる体験。僕は今、大勢の人々が亡くなり、苦しみ続けた場所に立っている。だから、このような悲惨な戦争を2度と繰り返してはいけないと強く思った。

2つ目は、平和記念資料館で当時の悲劇や苦しみを資料や写真で知ることができたことだ。入ってすぐの1枚目の写真は、平和で笑顔がある賑やかな広島が写っていた。しかし2枚目には、建物は崩れ、人は皮膚がだらだら溶け、真っ黒になった死体がたくさんあり、1枚目の広島とはくらべものにならない光景が写し出されていた。溶け破れた服、溶けた三輪車、黒くなったお弁当、全てのものが高温、熱線で溶けていった。家族と会うことができない。なぜ、無実の人々の命を奪うのか。僕と同じ中学生が死を覚悟、とてもおかしいと思う。とにかく苦しかっただろう。

3つ目は、平和記念式典への、参加人数がとても多いということだ。たくさんの方が参加したことは、誇りに思うべきだ。参加者の多くの方が戦争に反対をして、平和で暮らそうという誓いをしにきているのだ。このような方たちがいるから、今、日本は平和なんだと思う。

この2日間の体験で、僕は自分の生き方を見つめなおすことができた。2日間で学んだことを学校の友達や家族に伝えていきたいと思う。今でもまだ戦争が起きている。2度と原爆や核爆弾が落とされないよう、少しでも早く平和な世界になって欲しいと改めて強く思う。

派遣事業に参加して

私は、広島平和記念式典中学生派遣事業に参加して、今まで学校などで教わってきた以上のことを学ぶことができました。78年前の8月6日に起きたことは、今では記憶とともに風化してきているのかもしれませんが、しかし、広島に行き、自分で体験すると、この歴史を絶対に風化させてはいけなかったと感じました。

1日目にガイドさんから聞いた話の中で、「平和は自然にやっこない、平和は皆で力を合わせて手に入れるんだ。」という言葉がありました。私は、この言葉がとても心に残っています。なぜなら、現にウクライナで戦争が起こっていますが、この戦争も誰かが行動しないと終わりません。だから、この言葉のとおり、平和は行動しないと手に入らないとても特別なものなんだと思い、その平和を手に入れるためにも、核兵器を許さない気持ちを持ち、行動していきたいと思いました。

2日目は平和記念式典に参列しました。今年は過去最高の111か国が参加していた中で、数多くの人のお話を聞きました。その中の小学生の平和の誓いで、「今、平和への思いを一つにするときです。」というものがありました。その言葉を聞き、僕は世界中で協力をして平和に向かっていくこと。そして、核兵器を使わせないことが、平和のために大事なことだと感じました。

2日間、原子爆弾や広島のお過去について学び、この悲惨な歴史を繰り返してはいけないという思いが心の中で強くうまれました。広島に原子爆弾が落とされてから78年が経過しました。これだけの期間が経っても、原爆について学べるのは、被爆者の人達がおその歴史を残し伝えていたおかげです。だからこそ、今を生きる全員が、原爆の正しい知識をつけて、継承していくことが大切です。そして、自分自身も、今回の経験を周りのたくさんの人に伝えていきたいです。

原爆の恐ろしさ

私が広島平和記念式典に参加して学んだことは、主に3つ挙げられます。

1つ目は、原子爆弾による広島市の残酷な被害の様子です。多くの方が亡くなった背景は原爆の強烈な熱波でした。鉄が溶けて液体になるのは1500度ですが、原爆の熱波はなんと3000度から4000度と、はるかに超えています。このような想像もできない熱波が地上に降りかかったことにより、多くの死傷者が出ました。私は、原子爆弾の威力と被害の大きさを知り、その怖さと恐ろしさを感じずにはいられませんでした。

2つ目は、戦争は人の心を変えてしまうことです。原爆を落としたB29の真下には学校があり、その時ちょうど生徒たちは、校庭で遊んでいました。そんな笑顔あふれる子供たちの上に原爆なんて落とせるのでしょうか。戦争は人の体だけでなく心までも破壊します。私は、人が人の命を簡単に奪ってしまうような戦争は、決して起こしてはいけないものだ学びました。

3つ目は、原爆の放射能による被害です。そもそも原爆は核分裂ということが起こることで、莫大なエネルギーを生み出しているのですが、そのエネルギーが生まれてくるとき放射能という中性子が出てきます。これが生物に照らされると、生物の大事な遺伝子が破壊されます。つまり、万が一原爆の熱波で生き残ったとしても、放射能を浴びることは避けられないため、白血病などの当時では治すことのできない病気になり、数日で亡くなってしまいます。さらに、放射線は生物だけではなくその地上まで汚染させるので、広島に帰ることさえ叶えられませんでした。私は、原爆に遭われた人々の様々な悲しみや悔しさを考えると、今の自分には想像もできないほどの気持ちであっただろうと、胸が苦しくなりました。

日本には「核兵器を持たず、作らず、持ち込まさず」という非核三原則があります。この派遣事業に参加し、その大切さを改めて考えさせられました。原爆は、人の体や心、住むところのすべてを奪ってしまう凶器だと考えます。もう二度と使っても、作ってもいけないと思います。私は、自分たちだけでなく、すべての人々の未来を守っていくため、再びこの歴史を繰り返さないよう、自分にできることを一つ一つ取り組んでいきたいです。

平和を守り続けるために

私は今回、広島平和式典に参加して、自分の今いる環境が、どれだけはかないものなのかを実感することができました。

いつも一緒にいる家族、隣で笑い合える友達。当たり前にあるこの暮らしが、たった一つの爆弾のせいで目の前から消えてしまう。そんな「恐怖」を身にしみて感じました。

平和って何だろう。この2日間じっと考えてみました。戦争が起きないこと。家族や友達と一緒にいること。今この場所にいられること。これもあれも全部「平和」だと考えました。

じゃあ「平和」を守るためにはこの先、私達はどうすればいいか。たくさんの答えがでてきました。

家族を大切にすること、友達を思いやること、今いる場所を大切にすること。そして、戦争の恐怖を誰かに伝えること。

今、実際に被爆した人たちの平均年齢は約八十五才だと知りました。ということは、面と向かい話が聞ける時間は残りわずかしかないということ。この現状を変えることはできません。

けれど「伝える」ことはできます。戦争があったということは、絶対に途切れさせてはいけません。他人事にはしてはいけません。次につなげなくてはならないのは、私達だということを自覚しなくてはならないことを今回、学びました。

今は平和でしょうか。当時、日本を守ってくれた人達のように、私達は日本の現状について考えられているのでしょうか。

今の平和を守るため、それからこれからも平和でいるために私は、このことを周りのみんなに伝えていきたいです。

僕が学んだ3つのこと

僕は、川越市の代表として、広島に落とされた原爆について、広島に学びに行きました。そこで、3つ学ぶことができました。

1つ目は、平和記念公園の作りについてです。この公園は、元々たくさんの人々が生活していた場所でした。そのため、亡くなった方々へ向けたものがたくさんありました。例えば、噴水は、原爆の被害にあった人々は水を求めていたので、水を届けるという意味で設置されています。また、慰霊碑には、慰霊碑を囲むものがあります。それを近くで見ると、原爆ドームを守っているように見え、被害にあった人々を雨から守るという意味があります。このように、公園の作りから原爆死没者の慰霊と世界平和の大事さを学ぶことができました。

2つ目は、広島平和記念資料館についてです。ここには、現地でしか見られないものがたくさんありました。いろいろな人から衝撃的だといわれていたので少し怖かったですが、自分の目で原爆の恐ろしさ、今の生活がどれほど平和かということを実感できました。

3つ目は、広島平和記念式典についてです。僕は、今までテレビでもあまり式典の様子は見たことがありませんでした。今回の式典最中に、外からずっとたくさんの人たちの声が聞こえていました。調べてみると、この式典に対してのデモでした。また、デモは悪いことという印象がありますが、僕は、デモは絶対に悪いことではないと思うし、だからといって、この広島記念式典が絶対にいいことでもないと思います。表面上はいいことになっているけれど、このような側面もあるということを知りました。

最後に、めったにないこの貴重な経験を忘れず、今回学んだことを家族や友人に伝えていきたいと思います。

ヒロシマを見て感じたこと

私は、今回の広島平和記念式典中学生派遣事業を通して、当初の目的であった平和の尊さ、そして大切なことを学ぶことができました。

あの日、この場所で多くの命が一瞬で奪われ、生き残った人々も重い後遺症を患い、自分たちの生きたいように生きられなかった、そんな生き地獄のような出来事が起こっていたのだな、とガイドさんの話を聞きながら平和記念公園を見学しました。

広島平和記念資料館では、被爆者の方が自身の体験を描いた絵など、どれもインターネットで事前に調べていたものよりも、心がギュッと締め付けられるような、言葉に出来ないようなものばかりでした。その中でも特に印象に残っているものは、展示されている遺品と、私を含めた見学者の方々の雰囲気の変化です。遺品が展示されているコーナーでは、名札が付いた遺品や、遺品とともに遺族の方々のお話が書いてありました。それを見ると、この方は私が生まれるずっと前に生きていたということを感じました。

見学者の雰囲気の変化は、この事業で一番びっくりしたことでした。最初のほうは他の方々の話し声や、赤ちゃんの泣き声などが聞こえていたのですが、後半になるにつれて、カメラのシャッター音と足音しか聞こえなくなっていました。その異様な静けさが、広島に起こった悲惨な出来事を、より一層私に伝えてくれました。

広島平和記念式典では一人一人の発表に、平和に対する思いが込められているように感じました。

現在、世界には人類を何回も滅ぼせる量の核兵器があります。私は世界から一日でも早く、核兵器がなくなることを願っています。

平和な世界を目指して

広島平和記念式典中学生派遣事業に私が参加した理由は、78年前に起こった原子爆弾投下の惨劇について詳しく知りたいと思ったからです。現在、ウクライナへの侵攻を続けるロシアが核兵器を使用するのではないかと懸念が強まっています。そのなかで、核兵器である原子爆弾のおそろしさを知ることはとても大切なことだと考え、立候補しました。

1 日目は、平和記念公園へ行きました。ガイドの方に説明をしていただいたり、広島平和記念資料館で原爆による被害について学んだりしました。平和記念公園内に建立されている慰霊碑には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返せぬから」という、世界平和を願う碑文が刻まれていました。

資料館には、多くの被爆者の写真が展示されていました。私はその写真を見て、言葉を失いました。写っている人々の皮膚は爛れ、服はボロボロになり、泣いていたのです。まさに「地獄絵図」でした。私は、もう二度と原子爆弾を使用してはいけない、そう思いました。

2 日目は、平和記念式典に参加しました。式典の会場はとても厳かで、気持ちが引き締まりました。地元の小学生代表の児童の言葉からは、「平和な社会を築いていく」という、強い思いを感じました。8時15分、黙祷をおこないました。式典に参加した全ての人々の思いが一つになった瞬間でした。78年前の惨劇は人々の記憶から消えていくことなく、被爆者の方々の心に今も深く刻まれているのだなと思いました。

平和記念式典で、広島市長は「平和な世界を実現させるためには、核兵器を廃絶させなければならない」と話されました。しかし、世界において核兵器の数は減少傾向にある一方、そのうちの、現在も使用できる「現役」の核兵器の数は増加傾向にあると長崎大学の分析で明らかになっています。

では、核兵器の廃絶に向けて、私達にできることはあるのでしょうか。それは、世界唯一の被爆国の国民である私達が原子爆弾の恐ろしさを世界へと発信することです。一人一人が平和を願い行動すれば、いつか必ず核兵器廃絶できるはずです。そして、それができるのは、これからの社会を担っていく私達なのです。

平和な世界を目指して、あなたはどのよう行動しますか？

派遣事業に参加して

私は、今回の派遣事業に参加させていただき、多くの学びを得ることができました。

私が今回参加を希望した理由は、自分の目で見て知りたいと思ったからです。幼いときに「はだしのゲン」を読み衝撃を受けてから、今まで本や TV また美術館等で原爆についての話を、見たり調べたりしてきました。しかし、本や TV などでは限界があり、やはり現地に行き多くのことを学びたいという気持ちが強くなったからです。

そして 1 日目。広島に着き、とても驚きました。背の高いビルがたくさんあり、そのビルの量に負けないくらい緑が多く、綺麗な町並みでした。本や TV で見た、あの原爆の被害にあった焼け野原のイメージが強かったので、ここまで発展していることに自分の目を疑いました。その後、平和記念公園に向かいました。1 番印象に残ったのは「平和の灯」です。この火台の火はずっと燃えているそうです。しかし、この火を消す方法があるとガイドの方が教えてくれました。「核」がこの世界から無くなること。それがこの火を消す方法だそうです。1 日目の最後、資料館へ行きました。様々なものが置いてありました。どれも目を背けたくなるようなものばかりでした。自分と年齢が近い人のもも多く、言葉に言い表せない気持ちになりました。

2 日目は、式典に参加しました。平和への誓いの小学生の姿は、堂々としていて圧巻でした。この時、ガイドの方が仰っていた言葉を思い出しました。「広島に来て原爆の恐ろしさも学んでほしいけれど、そこから復興した広島の方達の強さも知ってほしい」ということを。広島の方々は、あの辛い経験をしたからこそ必死に歯をくいしばり、復興に向けて一歩ずつ進んできたのだと思います。そして、戦争を知らない子どもたちに、しっかりとそのことが受け継がれていると思いました。

起きてしまったことは取り返しがつかないけれど、それを知り、伝えることで二度とこのような惨事を起こさないようにすることはできるのではないかと思います。戦争がなくなり、核がなくなり、世界中が平和になって平和の灯の火が消える日をみずから作っていきたいと思います。

広島で学んだこと

僕の印象に残る場面は3つあります。

1つ目は平和の鏡です。平和の鏡は共通しているところがあります。それは世界地図があり、国境がなかったことです。そこで作られた意味を調べると「世界は一つ」そういった意味で作られていました。また、原子マークがあることです。この意味は原水爆禁止を訴えて書かれています。

印象に残った場面の2つ目は平和の灯です。「水を求めてやまなかった犠牲者を慰めるとともに、核兵器廃絶と世界恒久平和を求める」という意味を込めて、1964年8月1日に平和の灯が点火されました。「核兵器が地上から姿を消す日まで燃やし続ける」と伝えられています。

3つ目は原爆死没者慰霊碑です。この慰霊碑は、石室の中に原爆で亡くなった人々の名前が書いてある名簿が入っています。「平和都市として再建することを念願し、建立された慰霊碑」という思いで作られました。石室の正面にある「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」と刻まれている「言葉」が印象深く残っています。

平和記念資料館はたくさんの資料と情報があり分かりやすく、種類がたくさんあったこと、その時の広島の人々の写真や衣服などが残っていたことが僕にとって印象に残りました。特に印象に残った絵は、広島に原子爆弾を落として間もない時の絵です。その絵は、原爆ドームの近くの川「元安川」に川が見えなくなるほどの人が流されている絵です。1945年原爆投下の際、鉄が溶ける1500度の放射線が広島を飲み込みました。皮膚がボロボロの衣類のようにただれている人々が元安川に飛び込みました。しかし、その川は満潮のため水が高く、溺れ死ぬ人々や、海とつながっているため傷口が痛み力尽きた人々がたくさんいました。生きたくても生きられなかった方がたくさんいます。僕はこの経験を生かして当たり前のように過ごしてきた毎日に感謝し生きようと思います。核兵器は必要ないのです。

未来のために、今、私達ができること

私は、みんなが笑顔で安心して暮らせる世の中になって欲しいと思っています。しかし、今、この瞬間も世界では多くの争いが起こっています。私は、広島に行くことで、戦争や核兵器の恐ろしさを理解し、自分の知識を深めたい、そして、平和に対する意識をみんなにも広めていきたいと思い派遣事業に参加しました。

原爆ドームを実際に目の前にし、原爆の凄まじさや恐ろしさ、当時の人たちの悲惨さや苦しみを一気に感じさせる建物だという印象をうけました。それと同時に、当時の人々の生活も浮かび上がってきました。私は、原爆ドームを見ることで、本当にこの世から核兵器をなくさなければいけないという思いを強くしました。

平和記念資料館には、私と同じ、当時中学2年生の遺品がいくつかありました。彼らは、被爆したときどんな思いだったのか。本物の遺品から、苦しさや悲しみが伝わってきました。子どもたちの中には、家族にありがとうやさようならも言えず死んでいった子が多いと聞き、とても辛かっただろうなと思いました。

広島記念式典では、『平和への誓い』の中での「原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。」という部分がとても心に残りました。原爆は多くの人を殺し、生きた人へも苦しみを与える、この世にあってはならない凶悪な兵器だと痛感しました。また、「私達にもできることがあります。自分の思いを伝える前に、相手の気持を考えること。友達のよいところを見つけること。みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。」という言葉から、平和のために、今の私達でもできることは多くあるのだと再確認することができました。

今、自分たちがもっている夢や希望は平和な未来がないと、絶対に実現しません。平和な未来をつくるためには全世界の人々が平和を願い、戦争をせず、同じ過ちを二度と繰り返さないことが必要です。そして、世界から核兵器が無くなると本当の意味での平和は訪れないと思います。そのためにも、今を生きる私達が、それぞれの場所で平和のためにできることを実行していきたいです。

核のない平和な世界へ

僕は8月5日から6日にかけて広島に行き戦争について考えました。

1945年8月6日午前8時15分、人類史上初めて原子爆弾が広島に投下されました。街は一瞬にして廃虚と化し、多くの人々の生命が奪われました。被爆から78年となる今でも多くの被爆者が苦しんでいます。

原子爆弾には、通常の兵器にはない、熱線、爆風、そして放射能の甚大な被害があります。特に放射能は、人の細胞を壊し、白血病、悪性腫瘍などを発症させます。原爆の子の像を作るきっかけとなった佐々木禎子さんも、12歳で白血病となりましたが、治ると信じて千羽鶴を折り続け、生きる希望を捨てずにいました。原爆は罪のない子どもたちの命も奪ってしまうのです。

そして、今回の広島派遣事業の最大の目的である広島平和記念式典に参加しました。毎年テレビなどで見ていましたが、実際に会場に入ると独特の空気にもまれそうなほど、厳かな式典でした。会場の外側の通路にもたくさんの方が並んでおり、平和を願う人がこんなにも大勢いることに強く心を打たれました。こども代表の「平和への誓い」の中で、「原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与えて続けたのです。」とあり、この二日間で学んだことを大切に、被爆者が毎年どんな思いでこの8月6日を迎えているのか、自分なりに考えることができました。

戦後78年。とてつもなく長い年月が過ぎ、国内における戦争体験者の平均年齢は、85歳を超えています。戦争が「記憶」から「歴史」へと変わりつつあるなか、この悲惨な出来事を二度と繰り返さないために、一人一人がしっかり行動していき、僕自身も今回の広島派遣を通して平和を語り継ぎ、平和を訴える一人として行動していきたいと思います。

平和な未来へ

私が広島街を見て、まず第一に感じたことは、とてもきれいな街だな、ということでした。大きな建物が並び、路面電車の走る、本当に原爆が落とされたのかな、とってしまうほどに豊かな街でした。

しかし、資料館で目にしたのは、この世のものとは思えないほどの、悲惨な光景でした。建物はすべて目茶苦茶にこわれ、当時人々が使っていたものは、信じられないほどに変形していました。被爆者の言葉のひとつひとつも、とても重く、今時を描いた絵は恐怖を感じるほどに生々しいものばかりでした。現在平和記念公園となっているところは、元から公園なのではなく、大きな繁華街だったそうです。原爆は、一瞬にしてたくさんの建物をのちに広い公園ができるほどに破壊したということです。私はこれを聞いて、広島街がきれいなのは、たくさんの人々が、深く傷ついた人もいたはずなのに、一生懸命立てなおしていったからなんだと、とても感動しました。

大量の犠牲者、心も身体も傷ついた人々、壊れた街。戦争はマイナスなことばかりをたくさん生みます。良いことなんて一つも生みません。それをしっかり理解した上で、私たちは未来をつくっていかねばなりません。何にも怯えず、ゆっくり眠れる。きちんとご飯を食べられる。学校で学べる。友達と遊べる。そんなかけがえのない日常は、自分たちの手で平和を守らなければ続けていけないものです。武力で戦う必要はありません。私達には言葉があります。誰もが日常を大切に、未来への思いを分かち合っただけの平和です。これからも平和を私たち全員ですっと守り続けていきたいです。

平和について考える

私は、八月五日から六日にかけて広島に行き、原爆のことについて学んできました。

私が、この平和記念式典事業に参加した理由は、原爆が広島や長崎に投下されたことを知っている人が私たちの世代には少なく、私自身もこれまで知る機会がほとんどなかったことから、実際に現場に行き、原爆について学んでみたいと思ったからです。

八月六日、午前八時十五分、広島に原爆が投下されました。その原爆で約十四万人の市民がその年の末までに亡くなりました。体全体に大火傷を負い、皮膚がただれて、自分の家族や仲間を探したり、なんとか自分の家にたどりついた人もいます。また、放射能を浴びてしまい、亡くなった人もいます。原爆投下の時の地表温度は、およそ三千度から四千度になったといわれています。

この原爆投下時、私のように当時中学生の子どもたちは、広島市の市街地に働きに出ていて、その時に原爆が落とされて、命を落としました。将来の夢や希望を持っていたにも関わらず、死んでいった人たちの気持ちははかりしれません。私がこの子どもたちと同じ立場だったら、すごく戦争を憎み、将来を奪ったことを一生忘れないと思います。また、家族は死んでしまって、自分だけが生き残ったら、その孤独に耐えられずに死んでしまうかもしれません。

毎年行われる平和記念式典では、各国の代表者をはじめ多くの人々が参列し、二度とこのようなことをしないと固く心に刻み、約束します。広島の人々がどのような思いで、生き抜いてきたのかをそこに集まった人々で共有するのです。私も今回、平和式典に参列すると同時に資料館にも足を運びました。たった一つの原爆によってたくさんの人々の命が失われ、そのような出来事が日本で起こったということが信じられませんでした。また、一瞬にして灰になった物を目のあたりにして、一つの爆弾で破壊してしまう原爆の恐ろしさに言葉もありません。

広島に原爆が投下されてから七十八年たった今でも、核兵器「ゼロ」ではありません。核兵器の所有が一番多いロシアに次いで、二番目に多い米国、三番目に多い中国など、世界には計一万二千五百十二発の核兵器があります。世界で核兵器を「ゼロ」にするために、全ての国が核兵器の恐ろしさを学び、なくしていく取り組みをすることが大切だと私は思います。平和記念公園内にある「平和の灯」は、昭和三十九年八月一日以来ずっと燃え続けていて、核兵器がこの世界から

「ゼロ」になった時に消されます。この灯が消されて世界が安全になるために私たちができることは何か、今回の広島訪問で知ったことはまだわずかですが、自分の身近な人に学んできたことを伝えていき、みんなで「平和」を考えていく機会が増えたらいいと思います。



広島派遣事業に参加して

八月五日、僕は新幹線に乗って、広島に行きました。広島は世界で初めて原爆が落とされた場所です。社会の授業や道徳の授業で戦争について学ぶことがあります。僕の中で戦争は全くの他人事で、身近なものではありませんでした。実際にその場所に行って、戦争がどんなものだったのか知りたくなり、参加を決意しました。しかし戦争を知らない自分たちの世代が、これからどうやって戦争について伝えていけばいいのか、不安に思っていました。

平和記念資料館前の原爆が落とされた場所は、七十八年前ここに原爆が落とされたとは思えないほど、緑がいっぱいで、空が広がっていました。資料館には、ボロボロになりこげついた衣服や灰になったお弁当箱がありました。地面から掘り出されたたくさんの人骨の写真が飾られていました。僕の想像を超える悲惨なものばかりでした。心が苦しくなり泣きたくなりました。あの平和記念公園でこんなにも恐ろしいことがあったんだと僕は思いました。戦争というものは、今まで普通に生活していた人達をめちゃくちゃにしてしまうものだと思います。

八月六日、八時十五分。広島に原爆が落とされた時間。

「黙とう。」

の合図と共に、僕は目をつぶりました。「僕はこの悲惨な戦争を二度とおこしてはいけないということを伝えていきます」と心の中で繰り返し誓いました。黙とうの一分間は、毎年テレビで見る一分間とは全く違いました。たくさんの人の平和への想いが空へ向かって飛んでいるようでした。

体験を通して平和への想いを一つにすることは、僕たちがこれからしていかなければいけないことだと思います。学校の友達に自分の感じたことや体験したことを伝え、それをきっかけに戦争について話し合い、平和の輪を広げられればと思います。

「戦争」という言葉の重み

広島に行く前と行った後で私の中で大きく変わったことがあります。それは、「戦争」という言葉に対して感じる重みです。

広島について初めに思ったことは、とてもきれいで発展している街だなということです。この景色からは、実際に広島に原爆が落ちたということは想像ができませんでした。

まずは平和記念公園に行きました。ガイドさんの話を聞きながら回りました。その時に一番思ったことは、ガイドさんの大切さです。平和記念公園にあるものには全て、誰かの思いが込められていて、意味がしっかりあります。ガイドさんがいなかったら、深く知ることはできず、私の心を大きく動かすことはなかったと思います。現在、被爆者の平均年齢は 85.01 才と、年々高くなっています。そうすると、原爆の恐ろしさや平和の大切さについて伝える人が少なくなってしまいます。だから、ガイドさんのように、私たち若者に戦争について教えてくれる方はとても大切です。私も、戦争のない世の中にするために、今回体験したことをいろんな人に伝えていきます。

次に平和記念資料館に行きました。中は、外の雰囲気と全然違い、重々しい空気が流れていました。実際に見学してみると、原爆で亡くなってしまった方々の写真や言葉、その時の状況の全てが資料館にはつまっていました。私は、痛々しくて、怖くて、心が苦しくなり、まともに写真を見ることができませんでした。後から考えると、第三者目線で見ても恐ろしい光景なのに、実際に経験した方々はどれだけ辛い思いをしたか。私は、この時に一番、「戦争」という言葉の重みを感じました。

2日目の平和記念式典では、多くの国の方々が来日していました。原爆が落とされ、多くの方が亡くなったということは、これだけ重要な出来事なのだと実感しました。

今回、広島に行ったということにはとても大きな意味があります。実際、広島に行った私自身が、戦争を知らない同世代の人たちに戦争という言葉の重みを伝え、決してこんな悲劇が起きないようにしていきます。



川越市マスコットキャラクター

ときも

令和5年度 広島平和記念式典中学生派遣事業

報 告 書

令和5年11月

川越市 総務部 総務課 総務担当

〒350-8601 川越市元町1-3-1

Tel.049-224-5550(直通)